

筑波大学 Japan-Expert（学士）プログラム集中日本語授業について

入山 美保

要 旨

Japan-Expert（学士）プログラムは、筑波大学が 2014 年度に文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業に採択されたことにより発足した学位プログラムで、日本と母国との懸け橋となる人材の育成を目的としている。本プログラムの集中日本語授業では、日本語能力試験 N2、N3 以上を持つ学生が「アグロノミスト養成」、「ヘルスケア」、「日本芸術」、「日本語教師養成」の各コースで学ぶために必要となる日本語の総合的な運用力を身につけることを目標にしている。本稿では、本プログラムの集中日本語授業についての概要、授業報告、今後の課題について述べる。

【キーワード】 学士プログラム 集中日本語 専門日本語 人材育成

Intensive Japanese Classes of the Japan-Expert (Bachelor Degree) Program, University of Tsukuba

IRIYAMA Miho

[Abstract] In 2014, the University of Tsukuba was selected by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) as one of the Top Global Universities. Consequently, the Japan-Expert (bachelor degree) Program was established in 2016 to train international students who can work as mediators between Japan and their home countries. In intensive Japanese classes, our purpose is for students with N2 or N3 Japanese language proficiency levels to acquire comprehensive Japanese language skills in order to study one of the major courses in Agricultural Science, Healthcare, Art and Design, or Japanese Language Teacher Training. In this report, I will outline the intensive Japanese classes, describe their contents, and consider issues for future research.

[Keywords] Bachelor program, intensive Japanese, Japanese for specific purposes, developing human resources

1. はじめに

Japan-Expert(学士)プログラムは、筑波大学が2014年度に文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業に採択されたことにより発足した学位プログラムである。2016年度秋学期に第1期生が入学し、2018年10月に第3期生が入学した。

本プログラムが発足した背景には、日本再興戦略(2013年6月14日閣議決定)において、優秀な外国人留学生を戦略的に獲得し、少子高齢化の影響で人材不足が深刻な農林水産業やヘルスケア産業などを担う外国人材の育成及び日本語力や日本文化に関する知識を活用し、日本と母国との相互理解の促進や友好関係の深化に貢献しうる人材を育成するねらいがある。

本プログラムでは、日本に興味や関心を持つ留学生を対象に、高度な日本語力の習得、日本文化や社会への理解や関心、各専門分野における専門知識や技術、思考力を有する人材を育成することを目的としている。そのため、農学、ヘルスケア、芸術学、日本語教育のいずれかの専門性を身につけさせるために、以下の表1のように4つの学群・学類の中に、4つのコースを開設している。

表1 学群・学類と各コースの学士名

学群・学類名	学士名	コース名	学士名
生物資源学類	生物資源学	アグロノミスト養成	農学
看護学類	看護学	ヘルスケア	ヘルスケア
芸術専門学群	芸術学	日本芸術	芸術学
日本語・日本文化学類	文学	日本語教師養成	日本語教育

4コースのうち3コースで学群・学類と学士名が異なることからわかるように、学群・学類とは違ったアドミッションポリシー、カリキュラムを策定している。海外在住の高校生を受け入れることを前提にしており、プログラム生は、10月に入学し、4年後の9月に卒業する(図1参照)。

本プログラムでは、出願資格の日本語能力要件を日本語教師養成コースは日本語能力試験N2以上、その他3コースは、N3以上と緩和し、これまで日本語能力が不足していたことで受験できなかった学生にも受験機会を広げている。そのため、入学後の半年間は、集中日本語授業を行い、アカデミック日本語の総合的な運用力を身につけさせ、翌年度4月から学群・学類の授業を日本人学生と一緒に受けられるようにしている。卒業後は、プログラム生が日本と母国との架け橋となる人材になることを目指している。

コース	1年		2年		3年		4年	
	10月～3月	4月～3月		4月～3月		4月～3月		4月～9月
	日本語	Japan-Expert 共通科目 基礎科目、専門基礎科目		専門科目+インターンシップ				卒業研究
アグロノミスト養成コース	日本語集中授業 大学の授業で対応可能な 日本語能力の習得	J A P A N - E X P E R T 共通科目	基礎科目 （外国語や日本文化・日本事情等） 各コース専門基礎科目	アグロノミスト養成専門科目		農業・食品産業技術 総合研究所 (NARO) インターンシップ		卒業研究
ヘルスケアコース				ヘルスケア専門科目		介護施設、医療施設 インターンシップ		
日本芸術コース				日本芸術専門科目		母国の教育機関や日 本国内にある企業等 インターンシップ		
日本語教師養成コース				日本語教師養成専門科目		中等教育機関/ 現地日本語学校 インターンシップ		
卒業まで一貫した日本語授業の実施（全学的な日本語教育支援）								

図 1 Japan-Expert プログラム 入学から卒業までの流れ
(Japan-Expert プログラムのウェブサイトより掲載)

本稿では、Japan-Expert（学士）プログラムの集中日本語授業についての概要、授業報告、今後の課題について述べる。

2. 集中日本語授業概要

本プログラムでは、学群・学類の授業を履修する前の入学後半年間、日本語科目を集中的に 15 単位履修することが大きな特徴として挙げられる。本プログラムの入学者数は表 2 に示すように各コース若干名であり、さらにその人数を 2 つのクラスに分けているので、少人数のクラス編成である。

表 2 Japan-Expert プログラム 志願者、合格者、入学者数

コース名	志願者		合格者		入学者	
	2016	2017	2016	2017	2016	2017
アグロノミスト養成	5	4	1	1	1	1
ヘルスケア	4	2	2	2	1	2
日本芸術	1	10	1	1	1	1
日本語教師養成	7	17	3	4	3	4
合計	17	33	7	8	6	8

2.1 期間

秋学期に1コマ75分、1日3コマ、週に15コマの日本語授業を15週間行い、16週目の試験期間中に、期末試験や試験のフィードバック、復習を行っている。

日本語授業は、表3の時間割からわかるように、1、2、4限目に行われ、3、5、6限目に各コースで行われる専門日本語、体育、Japan-Expert フレッシュマンセミナー、専門基礎科目の聴講や履修等が行われている。

表3 2016年度秋学期上級クラスの時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	総合日本語	文法	文法	話す	話す
2	聞く	聞く	書く	漢字	漢字
3					
4	読む	読む	読む	書く	
5					
6					

2.2 授業科目

本プログラムでは、中上級と上級の2つのレベルの7科目「話す(2単位)」「聞く(2単位)」「読む(3単位)」「書く(2単位)」「文法(2単位)」「漢字(2単位)」「総合日本語(1単位)」と各コースで行われる「専門日本語(1単位)」の8科目15単位の科目を開設している。学群・学類の授業を履修するようになると、「読む」ことに多くの学習時間を割くことから、「読む」を3単位とした。

集中日本語授業では、学群・学類の基礎科目、専門科目等を履修する際に必要となるアカデミック日本語の総合的な運用力を身につけることを目標としている。そのために、講義の聞き取り、質疑応答、ディスカッション、ディベート、口頭発表のためのプレゼンテーション技術、専門分野の論文の読解や要約、レポートや報告論文の作成等の演習を行っている。

日本語授業のクラス分けは、TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese, 筑波日本語テスト集、筑波大学留学生センター(当時)作成)を用いて、実施している。TTBJの結果だけで、クラス分けを行うことが難しい場合は、出願時に提出のあった日本語能力を測る試験の結果や口述試験の様子も参考にクラス分けを行っている。

授業概要については、本学グローバルコミュニケーション教育センター(CEGLOC)で開設している補講日本語6、7レベルの授業概要(筑波大学教育推進部教育推進課2016)を参照して作成した。

2016年度開設授業の科目名、単位数、主な授業概要は表4の通りである。

表 4 授業科目名、単位数及び主な授業概要

科目名	単位	主な授業概要	
		中上級	上級
話す	2	興味関心のある分野や専門分野について理由や説明を簡潔に話したり、討論したりすることができるようになる。	社会的な問題や専門分野について、論理的に説明し、議論ができるようになる。
聞く	2	日常的だが、やや難易度の高いトピック、アカデミックな場面での講義の聞き取りができるようになる。	やや専門的で広い範囲のトピック、アカデミックな場面での講義の聞き取りができるようになる。
読む	3	意見文や論理的な文章、専門分野の文献が理解できるようになる。	いろいろなタイプの文章、専門分野の文献読解を行い、論理展開の形を理解し、精読、速読ができるようになる。
書く	2	やや専門的な話題について、1000 字程度の読み手にわかりやすい文章やレポート、文章構成の型を使って、順序立てて意見や報告が書けるようになる。	抽象的な事柄も含め、1500 字程度のまとまりのある文章が書け、専門分野の論文の要約、報告論文の作成もできるようになる。
文法	2	入学前に学習している文法項目を復習し、中上級レベルの文法項目を学ぶ。	上級レベルの文法項目を学び、書きことば、話しことばに使われている高度な日本語を理解する。
漢字	2	中上級の漢字語彙の読み書きを覚え、正確に運用できるようにする。	上級の漢字語彙の読み書きを覚え、正確に運用できるようにする。
総合日本語	1	学類の授業を受講するために必要な日本語力やスキルを総合的に身につける。	学類の授業を受講するために必要な日本語力やスキルを総合的に身につけ、日本語運用力を高める。
専門日本語 (各コース)	1	日本語を総合的かつ集中的に習得する過程において、各コースの教員から、基礎的な知識、専門用語を習得することにより、日本語に対する学習意欲を向上させ、今後の専門分野コースへの導入を行う。	

本プログラムでは、3 年から 4 年次の間に関連企業や機関でインターンシップを行うことが必修となっていることから、インターンシップ時に必要となる日本語能力も身につけられるように授業内容を検討した。

4 月入学の正規生の修得単位数が 124-125 単位であるのに対し、プログラム生は入学後半年間、日本語科目 15 単位を履修することから、138.5-139.5 単位を修得する必要がある(表 5 参照、コースごとに若干異なる)。残りの 3 年半で 4 月入学生とほぼ同じ 124-125 単位を修得しなくてはならず、卒業単位を 4 年間で修得するのは決して容易ではない。一例として、表 5 に筆者が担当する日本語教師養成コースと日本語・日本文化学類の卒業要件に必要な単位数の比較を示す。

表5 2016年度入学者 課程修了のための卒業要件の比較

日本語教師養成コース	単位	日本語・日本文化学類	単位
卒業研究等	9	卒業論文等	9
インターンシップ	3		
専門科目	47.5-71.5	専門科目	51.5-75.5
専門基礎科目	18.5-33.5	専門基礎科目	16.5-31.5
基礎科目 (日本語科目 15 単位含む)	36.5-45.5	基礎科目 (初修外国語 4.5 単位含む)	24-33
計	138.5	計	125

2.3 「総合日本語」

「総合日本語」は、筆者が担当した科目であるが、初年度の初回の授業でプログラム生からどのような内容を学びたいか聞き出し、授業内容を決定した。本プログラムは、日本の文化や社会を理解し、専門性を身につけた人材を育成し、日本国内もしくは母国の日本関連企業や機関に就職ができるようにすることを目指している。そのため、プログラム生の中で、日本の文化や歴史、社会問題や社会事情について学びたいという要望があり、「総合日本語」の中で取り上げることにした。授業の到達目標は以下の2点である。

1. 社会事情や社会問題について、日本や自国の状況について文献を用いて調べることができる。
2. 日本と自国とを比較して、意見を述べ、つながりのある文章で根拠とともにレポートにまとめることができる。

教科書は、日鉄ヒューマンディベロップメント、日本外国語専門学校(2001)『日本を話そう 15のテーマで学ぶ日本事情 [第3版]』を用いた。この中から、第13課の「政治のしくみ」と第14、15課の「日本の歴史」は後述する学外研修を実施することから、必ず取り上げることにし、他はクラスごとに学生の希望が多いテーマを以下の中から6～7程度選び、扱った。

- 第1課「住宅事情」
- 第2課「結婚と女性の社会進出」
- 第3課「高齢化社会」
- 第4課「日本料理」
- 第5課「平等社会と中流意識」
- 第6課「教育」
- 第7課「伝統芸術」
- 第8課「日本的経営」
- 第9課「日本人の労働観」

第 10 課「集団意識と肩書き」

第 11 課「社会保障と社会参加活動」

第 12 課「年中行事」

第 13 課「政治のしくみ」

第 14 課「日本の歴史 1」

第 15 課「日本の歴史 2」

「年中行事」では、年賀状の書き方を取り上げ、日本語担当教員やお世話になっている方宛に実際に年賀状を書いてもらった。

教科書は、2001 年発行のもので、掲載されている情報が古くなっていることから、課題ごとに予習用のワークシートを作成し、日本と自国の情報を各自で調べて来ることを課題とした。

日本の政治や歴史への理解を深めるために、学外研修としてプログラム生全員で江戸東京博物館（2 年目は東京国立博物館）、国会議事堂、憲政記念館を訪問した。江戸東京博物館では、ガイドの方に出来るだけ簡単な日本語で江戸や明治時代の歴史について説明してもらった。東京国立博物館では、伝統文化に触れる体験型プログラムのワークショップに参加し、伝統もようのお皿づくりを体験した。プログラム生には、参加レポートを課した。プログラム生のほとんどが訪問したことのない施設であり、ワークショップは個人では参加できないものであるため、ガイドや学芸員の方の説明を聞いて、新しい知見が得られたようだ。この学外研修はプログラム生に非常に好評であるため、今後も継続して実施する予定である。

2018 年度（第 3 期）は、佐々木（2017）『クローズアップ日本事情 15－日本語で学ぶ社会と文化』を使用し、総合日本語の授業を行う予定である。

3. 日本語教師養成コース「専門日本語」について

日本語 8 科目の中に「専門日本語」という科目がある。この科目のみ、各コースの教員が担当している。「専門日本語」は、各コースで必要な基礎的な知識、専門用語を習得することにより、日本語に対する学習意欲を向上させ、半年後にプログラム生が所属する学群・学類での授業が受けられるようにするための導入科目である。本稿では、筆者が携わっている日本語教師養成コースの「専門日本語」の概要について紹介する。

日本語教師養成コースでは、プログラム生が入学後半年間の集中日本語授業終了後に日本語・日本文化学類開設の授業についていけるようにするために、2017 年度（第 2 期）は、表 6 のように授業を計画した。

第 1 回目の「模擬授業の振り返り」について説明する。本プログラムの合格発表は 6 月初旬に行われ、入学希望者は、7 月初旬までに入学手続きを行う。入学手続きが完了

してから、実際に入学するまで3か月近くある。この期間を有意義に活用するために、2016年度(第1期)は、本学類の推薦図書を紹介した。また、関東在住の入学予定者には、8月中旬に行われる大学説明会の模擬授業に参加してもらい、後日、レポートを提出してもらった。海外在住の入学予定者には、模擬授業が「筑波大学チャンネル」で公開されていることから、それを見て、レポートを書いてもらった。2017年度(第2期)は、「日本語の語彙演習」の担当教員の提案でプログラム生が模擬授業を活用して、効果的な学習ができるように、履修生19名が4グループに分かれ、『ビデオで学ぶ 日本文化 日本事情 vol.1』(全153頁)を作製した。この中には、大学説明会で行われた模擬授業を含む4つの講義のスク립ト、語彙リスト、練習問題、コラムが収められており、日本語力が低い学生でも問題なく学習できるようになっている。国内外の入学予定者には、学習の利便性を考え、この教材の冊子を郵送した。2018年度(第3期)は、「日本語の語彙演習」の履修生28名がオープンコースウェアに公開されている7つの講義を使用し、学習管理システム manaba で学習できる教材を作製した。manaba の特性をいかし、練習問題、小テストがオンラインでできる仕組みになっている。

授業計画にある第2、3回は日本語学、第10、11回は日本語教育学に関する実際の授業に2週連続参加し(授業には担当教員である筆者も参加する)、授業後に manaba にレポートを提出してもらった。振り返り時までに他のプログラム生のレポートを読んで来てもらい、意見交換をした。担当教員は、語彙や授業内容を確認しつつ、必要に応じて補足したり、資料を配布して解説したりした。

表6 2017年度日本語教師養成コース「専門日本語」授業計画

第1回	授業オリエンテーション、講義の受け方、大学説明会の模擬授業の振り返り
第2回	授業参加:「言語と論理」
第3回	授業参加:「言語と論理」
第4回	「言語と論理」振り返り、語彙、ディスカッション
第5回	日本語教育文法と日本語文法(学校文法)とは?
第6回	日本語文法について
第7回	日本語文法について
第8回	日本語文法について
第9回	日本語文法について
第10回	授業参加:「日本語教育Ⅱ」
第11回	授業参加:「日本語教育Ⅱ」
第12回	「日本語教育Ⅱ」振り返り、語彙、ディスカッション
第13回	授業参加:「日本語・日本文化国際研修Ⅰ」
第14回	授業参加:「日本語・日本文化国際研修Ⅰ」
第15回	日本や日本文化、日本語に関して各自が授業を考え、発表
最終週	期末試験(日本語や日本文化についての小論文)

第 13、14 回の国際研修は、異文化交流を目的としたスロベニア・リュブリャナ大学での 2 週間の留学体験プログラムに参加する学生のための授業である。履修生は、現地で日本の言語や文化に関する研究発表を行う。プログラム生は、履修生が事前に準備した発表を聞き、日本語非母語話者の立場から意見を言って、発表内容の改善に役立ててもらった。第 15 回では、プログラム生も初中級レベルの日本語学習者を対象にした日本や日本文化、日本語に関する 30 分の授業の教案作成を行い、教えるとはどういうことかを学んでもらった。

第 5～9 回に行った「日本語教育文法と日本語文法」については、2016 年度に入学した第 1 期生の要望により 2017 年度入学の第 2 期生から取り上げることにした。第 1 期生に学類の授業を履修し始めた翌年度の 4 月以降に何か困っていることや集中日本語授業期間中に取り上げてほしかったことについて聞いたところ、日本人学生が高校までに学んだ日本語文法（学校文法）を理解するのが難しいということがわかった。「助動詞」「形容動詞」「五段 / 一段動詞」「カ変 / サ変」といった語彙は、日本語教育では出て来ない。日本語教師養成コースのプログラム生が学類開設の文法の授業を履修するために日本語教育文法と日本語文法の違いを理解することは、必須の項目であることから、2018 年度（第 3 期）も取り上げる予定である。

4. プログラム生の日本語履修状況

プログラム生の日本語履修状況を確認するため、5 週間ごとに個別面談を 1 人 15 ～ 20 分程度実施した。

第 1 回目：

- ・ Japan-Expert 日本語授業についての感想や要望
- ・ 各科目の難易度、宿題の量
- ・ 「専門日本語」について
- ・ 授業以外に日本語が話せる環境にあるのか、どの程度話しているのか
- ・ 現在、困っていることや悩んでいること等

第 2 回目：

- ・ 2 か月半、日本語を勉強して伸びたと思う科目、苦手な科目
- ・ 「専門日本語」について
- ・ 授業以外に日本語が話せる環境にあるのか、どの程度話しているのか
- ・ 現在、困っていることや悩んでいること等

第 3 回目：

- ・ Japan-Expert 日本語授業を振り返っての感想
- ・ Japan-Expert 日本語授業を振り返って伸びた科目、あまり変わらない科目

- ・授業以外で普段どの程度、日本語を使っているか
- ・Japan-Expert 日本語授業への要望
- ・春休みの予定等

個別面談の内容は、可能な範囲で、日本語担当の非常勤講師、本プログラムコーディネーターに報告し、情報共有を行った。

個別面談を通して、中上級クラスのプログラム生は日本語力に不安を抱いていることがわかった。中上級クラスには、日本語能力試験 N1、N2 にまだ合格できていない学生がいたので、キャリアアップを目指して第2期生には11月から週に1コマ、計15コマ、非常勤講師の先生にお願いし、補習（単位は修得できない）を実施した。プログラム生からは、文法や語彙、読解を扱ってほしいと要望があり、それらの弱点を克服するための授業を行ってもらった。初年度は、筆者による個別の補習を行った。

第1期、2期生ともに、全員、全日本語科目の単位を修得することができたが、学生の習熟度は異なっている。「総合日本語」の授業最終日にクラス分け時に用いたTTBJを実施しているが、1つ上のレベルへの伸びが見られる者もいれば、全く伸びが見られない者もいた。

集中日本語授業期間中、経済的な事情によりアルバイトをしていた者がいた。成績が良くなかった学生の中には、アルバイトとの両立が難しかったと思われる者もいる。今後もアルバイトをしながら、学群・学類の授業を履修することになると思われるので、各コースで授業の出欠や学習状況の確認を定期的に行う必要があるだろう。

5. 今後の課題

5.1 本プログラムとしての到達目標

本プログラム開始初年度は、入学者数が少なかったため、プログラム生のレベルに合わせて、担当教員は授業内容を検討していた。

最終的には学群・学類の基礎科目、専門科目等を履修するための日本語運用力を身につけるというのが目標であるが、中上級クラスではそれが達成できたとは言い難い。上級クラスにしてもどこを到達目標とするのか、初年度、2年目の授業内容や成果物を見て、今後、検討していく必要があるが、入学者数が現状の少人数のままだと、プログラム生のレベルに合わせて授業内容を検討するという状況は、続くと思われる。

5.2 異なるレベル (N1, N2, N3) への対応

初年度にプレースメントテストとしてTTBJを実施したところ、N1、N2、N3レベルに分かれたが、2つのレベルしか開設できなかったことから、N1とN2は同じクラスに

して授業を行った。しかし、1つのクラスにN1とN2の2つのレベルの学生がいたことから、担当教員はどのように授業を行えば良いのか苦慮していた。科目によっては、N1のレベルの学生にとっては易しい、N2レベルの学生にとってはついていくのが大変という状況が起こり、それが試験結果にも表れていた。最終面談時に学生から本プログラム集中日本語授業の中でレベルの合った授業を開講して欲しかった、上級クラスと中上級クラスの間のレベルのクラスがあれば良かったという声があった。

本プログラムの受験時の日本語能力はN2、N3以上としているが、実際にはN1のプログラム生も入学してくるので、日本語能力に合わせると、3つのレベルのクラスを開設する必要があるが、入学者数が少ないことから、2つのクラスしか開設できない。日本語能力の高い学生には8科目15単位の中で、いくつか単位認定をする必要がある。他の外国語科目では、語学試験に合格していれば、4.5単位中1.5単位を認定しているので、日本語科目も同様に検討する必要があるだろう。

5.3 「専門日本語」について

集中日本語授業の中で、プログラム生の専門分野をどのように取り上げるべきか、専門日本語との橋渡しをどのように行うべきか、各コースでどのような要望があるか等、検討する必要がある。本プログラム初年度に各コースの専門と関連のある書籍を購入し、プログラム生の希望に応じて「読む」で教材として扱った。また、「話す」や「書く」で自身の専門分野について話したり、書いてまとめたりすることもあった。集中日本語授業が有益なものとなるように、「専門日本語」を担当している各コース担当教員から具体的な内容について聞き出す必要がある。

5.4 学群・学類開設授業の聴講や履修について

集中日本語授業は、Japan-Expertプログラム生のための少人数のクラス編成で、学群・学類生とは離れた環境で学習を行っている。プログラム生の中には、現在の自分自身の日本語力を測るために、また半年後の学群・学類の授業についていくにはどのような準備をしたら良いのかという思いから、学群・学類の授業の聴講を希望している。前述したように、プログラム生は学群・学類生より修得単位数が多いことから、聴講したい授業を履修することが可能なら、単位を修得したいと考えているようである。プログラム生の日本語力が高い場合は、入学直後から学群・学類科目の聴講や履修ができるよう担当教員に依頼している。

プログラム生の中には、少人数の日本語授業内で優劣を感じている者もいたので、学群・学類の授業の聴講や履修を勧めて、大人数の中で専門科目の授業を受けるということはどういうことかを体感させる必要があるだろう。

5.5 レポート添削について

第1期生から課題レポートや期末レポート等の日本語添削を行ってほしいという希望が出ていたので、添削をしてほしいレポートがあれば、送信するようと言っていたが、学生から送信されることはなかった。学生によっては、クラスメートに日本語の添削をしてもらっていたようである。

最終学年時、特に大学院への進学を希望する学生は卒業論文相当のものを書く必要があるので、大学院生に日本語添削を依頼したい学生も出て来ると思われる。今後、プログラム生のライティングを支援する体制を整える必要がある。

5.6 授業以外の日本語環境について

日本語授業以外にどの程度、日本語を使って生活しているか確認したところ、サークルに入った学生やアルバイトをしている学生は、日本語を使う環境があるようだが、ほとんどの学生が日本語を使っていないことがわかった。

本プログラムでは、日本人学生と留学生のシェアハウス型の学生宿舎であるグローバルヴィレッジで生活することを勧めているが、居住している日本人学生との生活リズムが異なるといった理由で、普段は挨拶程度で、ほとんど話していないようである。

第1期生からチューターと交流する機会がない、日本人学生と接する機会がないという声を受け、2年目の2017年度は、プログラム生がチューターと交流する機会を増やすために、歓迎会(10月)や忘年会(12月)といったイベントの企画、学外研修にもチューターの参加を促したが、参加率は低かった。

交流する機会をつくっても、留学生、チューターの双方が交流したいという気持ちを持たなければ、関係を築くのは難しいということを改めて感じた。

プログラム生からは、チューターが大学院生であると、気軽に接しにくいという声もあったので、同学年か出来るだけ学年が近く、イベントに積極的に参加する意欲のある学生にチューターを担当してもらえるように選定する必要があるだろう。

5.7 学群生・学類生、大学院生の授業への参加について

2017年度は、日本語・日本文化学類や大学院の学生に対して、中上級クラス「話す」の会話パートナーの募集を行った。11月から毎週水曜日に1名、木曜日に4名の学類生に参加してもらい、日本語授業の中で、会話パートナーを担当してもらった。

日本語母語話者や日本語力の高い学習者との会話機会を増やすことで、日本語でのコミュニケーションが円滑にできるようになることを目標とした。会話パートナーに応募してくれた学生の中には、将来、日本語教師になりたい学生が多く、良い経験になったようである。また、上級クラス「話す」の最終発表は、中上級クラスの会話パートナー

や第 1 期生にも聞いてもらった。次年度以降も担当教員及びプログラム生の同意が得られれば、会話もパートナーを募集し、交流する機会を増やしたいと思っている。

6. おわりに

本稿では、筑波大学 Japan-Expert（学士）プログラム集中日本語授業の概要や今後の課題について述べた。本プログラムは、2016 年度秋学期より開始し、2018 年 10 月に第 3 期生を迎えた。文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業に採択された大学の中でも、本プログラムのように日本語能力の要件を低くして留学生を受け入れる学士プログラムを開設している大学はなく、非常に先駆的な取り組みを行っている。

本プログラムに入学した学生が、日本語能力が低いという理由で学習不振に陥るといった状況が起きないよう、学群・学類への橋渡しとなるような日本語授業を運営していきたいと思っている。そのためには、集中日本語授業を終了したプログラム生に対して、日本語科目が学群・学類の授業の中でどのように役立っているのかを調査する必要がある。

参考文献

佐々木瑞枝（2017）『クローズアップ日本事情 15－日本語で学ぶ社会と文化』ジャパントイムズ

筑波大学教育推進部教育推進課（2016）『平成 28 年度開設授業科目一覧』朝日印刷

日鉄ヒューマンディベロップメント、日本外国語専門学校（2001）『日本を話そう 15 のテーマで学ぶ日本事情〔第 3 版〕』ジャパントイムズ

参考ウェブサイト

筑波大学 Japan-Expert（学士）プログラム ウェブサイト

<http://jp-ex.tsukuba.ac.jp/> 2018 年 10 月 10 日閲覧

日本再興戦略 ウェブサイト

https://www.kantei.go.jp/jp/headline/seicho_senryaku2013_old.html

2018 年 10 月 10 日閲覧